



インドネシアの物流を支えるジャカルタの港の視察に同行する樋口さん(右から3人目)

現場での経験を生かし ASEANのさらなる発展に貢献したい

ASEANなどへの協力を担当するJICA東南アジア・大洋州部。樋口さんはラオスの教育支援やインドネシアのインフラ整備を手掛けた経験を生かし、現場の支援が草の根の人々に確実に届くよう奮闘している。

教員志望だった 大学時代

子どものころからの夢である教師を目指し、教育学を専攻した大学時代。高校生の時に読んだ世界の食事情に迫ったルポタージュの影響で、貧困に苦しむ開発途上国の人々の生活にも興味を持っていました。そんな中、JICAの仕事を経験する合宿セミナーがあると聞いて参加することに。途上国の人々と対象にした研修の企画に取り組み、日本のどこでどんなことを学んでもらうか、他の参加者と力を合わせ、一からその内容を考えました。これをきっかけに、世界を相手にしたスケールが大きい仕事に魅力を感じ、国際協力を仕事にしたいと思い始めたのです。

そこで、今まで学んできた教育分野ではどんな協力ができるのかを見つけたいと大学院に進学。教育は生きていく上で欠かせないもの。学校に行けない途上国の子どもたちに教育の機会を与え、その国の発展に貢献できる仕事がしたいと感じるようになりました。

仕事の流儀を 身に付ける

2年目の人間開発部では、東南アジアの基礎教育分野を任せられました。その中でも力を入れた国の一つがラオス。ASEANの中でも経済成長が遅れ、子どもたちの就学率も低

かったからです。

地方の村に行ってみると、学校といつてもぼろぼろの黒板が一つあるだけの掘っ立て小屋。子どもたちが適切な環境で思う存分学べるよう、親と教員が協力して授業の改善や学校の運営に携わることができるよう組みづくりを始めました。

しかし、全てがうまくいったわけではありませんでした。どう教育の質を高めるかについて、日本人専門家や現地関係者と意見が対立することもしばしば。「人の意見をもっと聞きなさい」と当時の上司にも怒られました。専門の教育分野ということもあり、周りが見えていなかったのかもしれませんが、それからは、いかに周りの人と協力して現地のニーズに応えていくかが自分の課題となりました。

そして転機となったのが、インドネシア事務所です。初めての分野で分からないことも多かったのですが、周りには交通の専門家やインフラ支援に精通した先輩方がいました。アドバイザーをもらったり、励ましてもらいながら仕事をすることが、いろいろな人と協力してこそ、国際協力なのだと思えました。

当時から首都のジャカルタでは交通渋滞が深刻な問題でしたが、「大規模な整備をしなくても、道路の停止線やバス停の位置を変えるだけで状況は改善する」という道路建設の専門家の意見を聞き、このアイデア



JICA東南アジア・大洋州部
東南アジア第二課
調査役

樋口 創
HIGUCHI Hajime

大学院卒業後、2005年にJICAに就職。無償資金協力部(当時)、人間開発部、地球ひろば、インドネシア事務所を経て、2013年8月から現職。

ラオス支援の 戦略をつくる

現在の東南アジア・大洋州部では、再びラオスを担当しています。またラオスの人々と一緒に仕事ができるとあってやりがいを感じる日々です。

今の私の役割は、プロジェクトが効果的に実施されるよう、予算を割り振ったり、支援計画を立案したりと、第一線で活躍する人たちが働きやすい環境をつくること。予期せぬトラブルが発生することも多いのですが、教育支援やインフラ整備の現場での経験を生かして対応しています。

今後ますます成長が期待されるASEAN。その一員であるラオスはもちろん、ASEAN全体のさらなる発展に貢献できるように、日々業務に励んでいきたいと思っています。



マラッカ・シンガポール海峡を通る船の安全を守るスタッフたちと